

北海道内における食虫植物の群落と生態

外山 雅 寛
(新篠津村立新篠津小学校)

本道に食虫植物として知られているものに、ムシトリスミレ属 *Pinguicula* L. ではムシトリスミレ(夕張岳、幌尻岳など)1種が、タヌキモ属 *Utricularia* L. では、ホザキノミミカキグサ、ムラサキミミカキグサ、ヒメタヌキモ、コタヌキモ、タヌキモが、モウセンゴケ属 *Drosera* L. では、ナガバノモウセンゴケ、モウセンゴケの他にその中間種サジバモウセンゴケがある。

これ等の食虫植物のうち筆者が最も興味を持っているものは極めて小さくて目立たない植物—ミミカキグサ類といわれているものである。

本稿では、特にミミカキグサ類とコタヌキモを中心としてまとめてみたい。

1. ミミカキグサ類の本道における分布

本道には、かつてミミカキグサ類が分布していたことは確かであったが、それらの自生地が大規模開発、排水事業等によって今まで消滅したかのように考えられていたこともまた事実である。図鑑によっては、ムラサキミミカキグサとホザキノミミカキグサの両種を載せているものと、ホザキノミミカキグサを北海道分布から除外しているものがある。そして、北海道内で刊行された植物図鑑には、これらの両種とも載せられたことがない。

昭和53年から54年にかけて北海道の重要な植物群落115か所が選定され、その調査結果が環境庁より「日本の重要植物群落」(北海道版)としてまとめられたのは翌昭和55年2月であった。そして、この調査からもミミカキグサ類の確認はなされていない。調査の時期が適当でなかったか、あるいはこれらの植物が極小の植物であったために調査もれとなったのかもしれない。

しかし、近年それらの極小植物の道内分布が幸いにも再確認されるに至っている。本道においてミミカキグサ類の再確認を報ずる最初の文献は、原松次(1979)氏編集の「北海道胆振地方植物目録」(Matsuji Hara, Enumeration of Plants in Province of Iburi, Hokkaido, Japan.)—文化女子大学室蘭短期大学研究紀要別冊である。本目録によれば、ムラサキミミカキグサが北海道胆振管内苫小牧市と白老町から再確認されていることがわかる(このときホザキノミミカキグサは確認されてい

い)。さらに筆者は、1983年7月、北海道石狩郡新篠津村よりムラサキミミカキグサとホザキノミミカキグサの2種が自生することを確認している。これは恐らく現在知られているミミカキグサ類の分布では、日本における最北限であると考えられる。ミミカキグサ類の自生地では江別市旧東野幌湿原がかつて知られるところであるが、大規模排水事業・農業開発等によってすでに消滅している。ある出版物では江別市にヒメタヌキモの自生が記録されているが、今は自生することはないものと思われる。東野幌湿原そのものが現在では砂ばく化した乾燥地となっており、モウセンゴケ1種のみしか確認できないからである。もし自生するのであれば正確な位置を知りたいと思っている。

2. 新篠津湿原におけるミミカキグサ類・コタヌキモの群落と生態の諸相

(1) 新篠津湿原について

新篠津村は、東経の東側は141度40分25秒、北緯の南側43度9分16秒、北側は43度17分0秒の範囲で、東西最長7.8km南北最長14.3kmにおよび大河石狩川の右岸に位置している。南方は江別市、東方は空知郡北村、西方は石狩郡当別町に隣接し、北方は樺戸郡月形町に接している。新篠津湿原は旧第五小学校の前方に位置し、当別町の「金沢」に最も隣接した所に位置している名もない湿原である。著名な湿原でないためか「金沢

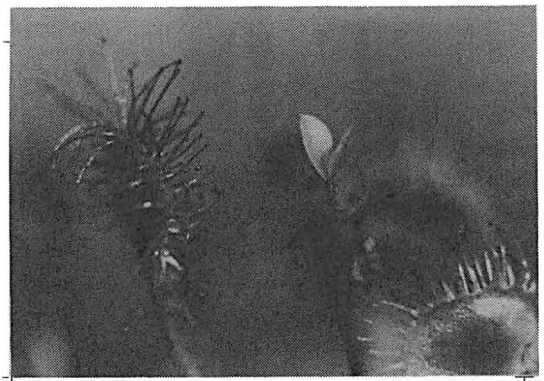


写真1. 北海道新篠津村産ムラサキミミカキグサ、モウセンゴケとよく混生している。

湿原」とか「学田湿原」とか不適當な名で本に書かれることがある。「金沢」は当別町の1地名であり、「学田」などというものもかつてはあったが今はないので筆者は「新篠津湿原」と称している。1万年前は古日本海と太平洋をつなぐ海底であったが、今は8千年の地史をもつ高位泥炭地の湿原であるが、排水事業のために崩壊過程をたどり、今は数年前のおもかげもなく水位の低下が著しい(園芸用ピートモス採取工場の私有地となっている)。

(2) 食虫植物の群落・生態の諸相

本村における食虫植物中コタヌキモ *Utricularia intermedia* Heyne は水位低下により雨量不足の時は極めて異常な環境下にさらされ、植物体自体の乾燥化も見られるが、適度な雨の後は再びよみがえるなどをくりかえしている。湿原内には、池といわれる程大きなものは非常に少なく、比較的大きな群落が1つと小さな群落が数か所の他、排水溝等に自生が見られる。

コタヌキモは、タヌキモ、ヤチコタヌキモ、ヒメタヌキモ等と混同される恐れがあるが、筆者はこの植物については3年間継続観察をし、花部の写真も撮影している。その特徴を記すと花色は鮮黄色、距は下しんとほぼ同長で前方につき出している。これはコタヌキモの特徴でもあり、果実もできない。コタヌキモは極度な水位の低下をまねいた所では、凹地の中心部におり重なるように集まり、植物体自体の乾燥をまねくことになる(写真2を参照のこと)。写真3は、水位が比較的に低下した所に自生するコタヌキモで、水量の十分な泥炭地排水溝では写真4のように正常な状態で自生している。

最も大きな群落は、エゾノヒツジグサ、ミカツキグサ、ジュンサイ、カキツバタ、エゾホシクサ等が生育し、その周辺部にはモウセンゴケ、ウメバチソウ、トキソウなどが生育し、その周囲をさらにヤチヤナギがとり囲んでいる。

次にミミカキグサ類の自生状態についてふれてみたい。本湿原に自生するミミカキグサ類は先にあげたようにムラサキミミカキグサとホザキノミミカキグサの2種のみである。このうちムラサキミミカキグサの群落の数は最も多く、大群落は1つで他の群落は湿原一帯に散在している。小さな群落は径30cmくらいのものがあるのでよほど注意を払わなければ見落としてしまう恐れがある。ムラサキミミカキグサが好んで生育する場所は、背丈の高い草が生えない所で多くの群落を調査した結果、ミカツキグサーヤチスギランーモウセンゴケ群落とミカツキ

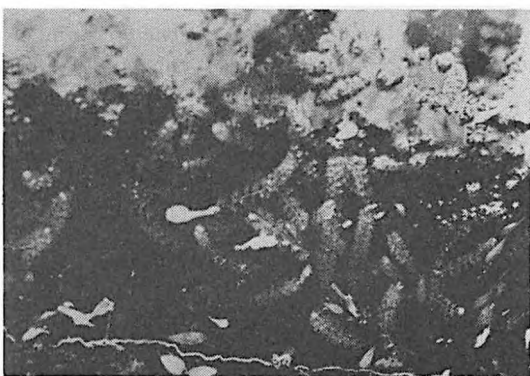


写真2. 極度に水位の低下した場所に生育するコタヌキモの状態。写真3. 比較的に水位が低下した場所に生育するコタヌキモの状態。写真4. 泥炭地排水溝に自生する正常状態のコタヌキモ。(上から写真2,3,4)

グサーエゾホシクサーモウセンゴケ群落の中に自生する場合の二つによって代表される。表土における共通した条件は粒子の細かい味そ状(のり状)の泥炭土といえる。ホザキノミミカキグサもやはり同じような条件をそなえた環境にのみ生育している。短期間での観



写真5. 最も普通に見られるムラサキミミカキグサの葉。



写真6. 水量の多い所で異常に伸びるムラサキミミカキグサの葉



写真7. ホザキノミミカキグサの花部。

察であるので、このような条件をそなえた所を細密に調査すればなお多くの群落を発見することができるであろう。

また、本湿原にはキダチミズゴケ *Sphagnum compactum* Lam. et Cand. オオミズゴケ *Sph. palustre* L. ムラサキミズゴケ *Sph. magellanicum* Bridel.

サンカクミズゴケ *Sph. recurvum* P. Beauv. ウツクシミズゴケ *Sph. pulchrum* (Lindl.) Warnst (ミズゴケ類の同定者：広島大学名誉教授 鈴木兵二) の5種のミズゴケを産するが、ミズゴケの生えているところではミミカキグサ類は共存できない。

驚異的なことは、自然状態では極端に水分が少なく半ば乾燥した硬い表土の場所であっても生育が認められておりムラサキミミカキグサに限っては環境に対する適応性が非常に大きい。その逆の場合についても若干の知見を得ることができた。小宮定志氏が「ミミカキグサも水草」(「水草研究会報」No.10) という報文を発表されているが、筆者はこのことをムラサキミミカキグサで確認することができた。ムラサキミミカキグサの葉の形態を「日本の野生植物」Ⅲ(平凡社刊)で調べてみると「地上

葉はへら形で、長さ3-6mm。」と記載されていた。しかし、これは正常葉の形態で注目すべきことは環境状態、なかでも水量などの相異によって葉の形態に著しい差異があることが観察されている。写真5はムラサキミミカキグサの正常葉を示したものであるが、水量が比較的多い所では葉を糸状にどんどん伸ばしていく場合があることを確認した。その長さはけたはずれに長く、最長のもので測定した結果では4cmを記録している。これは全く別種を思わせる異形の葉であり、先端がとがっている。

ミミカキグサ類では線形の葉をもつものにミミカキグサ *Utricularia bifida* L. があるので、もしやそれではと北海道大学温室主任の荒井道夫先生に連絡をとったところ、ムラサキミミカキグサはそのような葉をつけることがあるという体験豊かな貴重な返答を得ることができた。

開花した花もまぎれもなくムラサキミミカキグサの花であった。そして、試みに冠水し、まったく沈水状態にしてもどんどん生育を続けることも確認することができた。これは、まさに食虫植物界の驚異現象であり、ミミカキグサ類そのものが、水陸両生の植物であり、また水草であることが理解できた。ムラサキミミカキグサの花軸は新篠津湿原では極くみじかく1-5cm程で花をつけている。ホザキノミミカキグサは、本湿原では生育が局限されており、発見された群落は2群落に過ぎない。

以上新篠津湿原における食虫植物を中心に知見を得たことをまとめたが、当地にはなお多くの湿原植物が自生するので、それらについての報告は別の機会に改めてまとめようと思っている。〈追補〉かつて根室市在住の知人(現江別市在住)よりムラサキミミカキグサが根室にも生育することを聞いている(筆者未確認)。